

知ってますか  
技術の

あれ  
これ

3

# 『宝島』とロイド少年 灯台技術者スティーヴンソン一家 (1)



三浦 基弘  
MIURA Motohiro  
大東文化大学講師

## 小説『宝島』の魅力をさぐる

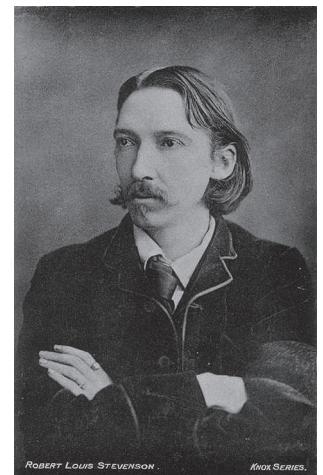
古今東西の好きな冒険小説を挙げろといわれたら、子ども、大人を問わず『宝島』は5本の指に入る作品であろう。筆者が『宝島』に初めて接したのは、映画であったと思う。主人公のジム・ホーキンス少年がリング樽に入って、海賊の悪だくみを盗み聞きしているシーンは今でも忘れない。この小説を初めて読んだのは、教職に就いてからである。再度、丁寧に読んだのは、1993年、グラスゴー大学から研究員 (research fellow) として招聘を受けたからである。ある教授から作者のスティーヴンソンは灯台技師の息子で跡を継ぐために大学で土木工学を専攻したことを教えてもらった。そして、日本との興味深い関わりも判った。世界中の子どもと大人を魅了した小説『宝島』の魅力のひとつは、直接的な「教訓」とか「お説教」がないところであろう。そして子どもには、単純に面白いという子どもの読み方、大人には、当時の時代背景を見据えた大人の読み方ができるように、緻密に構成されていると思うのである。

物語は次のような文からはじまる。「郷士のトレローニさん、医者のリヴシー先生、そのほかの紳士たちが、ほくに、宝島のことをすっかりくわしく始めから終わりまで、ただし、まだ掘り残した宝もあるのだから、島の位置だけは隠して、それ以外はすべて書きとどめておくようにといわれたので、いまペンを執っているのはキリスト紀元17-年だが、話は、ぼくの父が「ベンボー提督亭」という宿屋を開いていた

時までさかのぼって、そこへ、日焼けした、刀傷のある、年とった船乗りが現れ、泊りこむことになった時から始めることにする・・・。」(阿部知二訳 岩波文庫)。このベンボー提督 (Admiral John Benbow 1653-1702) は、実在したイギリス海将で、海賊と戦い、またフランス艦隊とも戦い、<sup>せつきやく</sup> 隻脚を失った。当時の英雄であったという。こういう実在する人物をさりげなく物語に登場させることが、大人の読者を惹きつけるのではなかろうか。

## R.L. スティーヴンソンの生い立ちとロイド

R.L. スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson) は1850年スコットランドのエディンバラで生まれた。父トーマスは灯台技師。父は代々灯台技師一家に生まれて当然のことながら息子にも跡継ぎのため、技師の道を勧めた。小さいころは、父の手がけた灯台や港を訪ねていたという。スティーヴンソンはエディンバラ大学の土木工学科に入学。20歳のとき、「灯台用新型明滅灯」という論文を書き、王立ス



Robert Louis Stevenson  
(1850-1894)